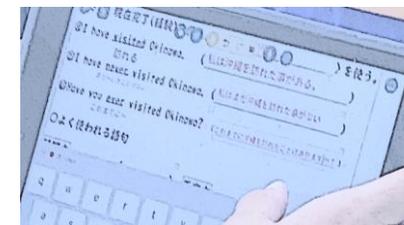


# 富田林市 教育DX実現プラン (令和6年度～)



富田林市教育委員会  
令和6年3月

# 1. Society5.0とこれからの学校教育

## Society5.0と教育DX

これからの社会は、AI（人工知能）、ビッグデータ、IoT（Internet of Things）、ロボティクス等の先端技術の発展・利活用により、大きく変化することが予想されます。そうした中、国においては「一人ひとりが多様な幸せ（well-being）を実現できる社会」としてのSociety5.0の実現をめざした取組みが進められています。

学校教育においては、学習指導要領による「主体的・対話的で深い学び」の実現や、GIGAスクール構想による多様な子どもたちを「誰一人取り残すことのない、公正に個別最適化された学び」の実現が求められています。今後は、これからの時代をみすえ、一人ひとりが持続可能な社会の担い手として、その多様性を原動力とし新たな価値を生み出していく力や、正解のない課題に対し当事者意識を持ち、他者と協働しながら新たな価値創造を生み出す力等の育成に取り組んでいかなければなりません。

加えて、デジタル技術の活用による保護者と学校との連携充実や利便性向上、教職員の働き方改革の推進等を一体的に推し進め、より一層の教育の質の向上を図るために、教育DX（デジタル・トランスフォーメーション）の実現が求められています。

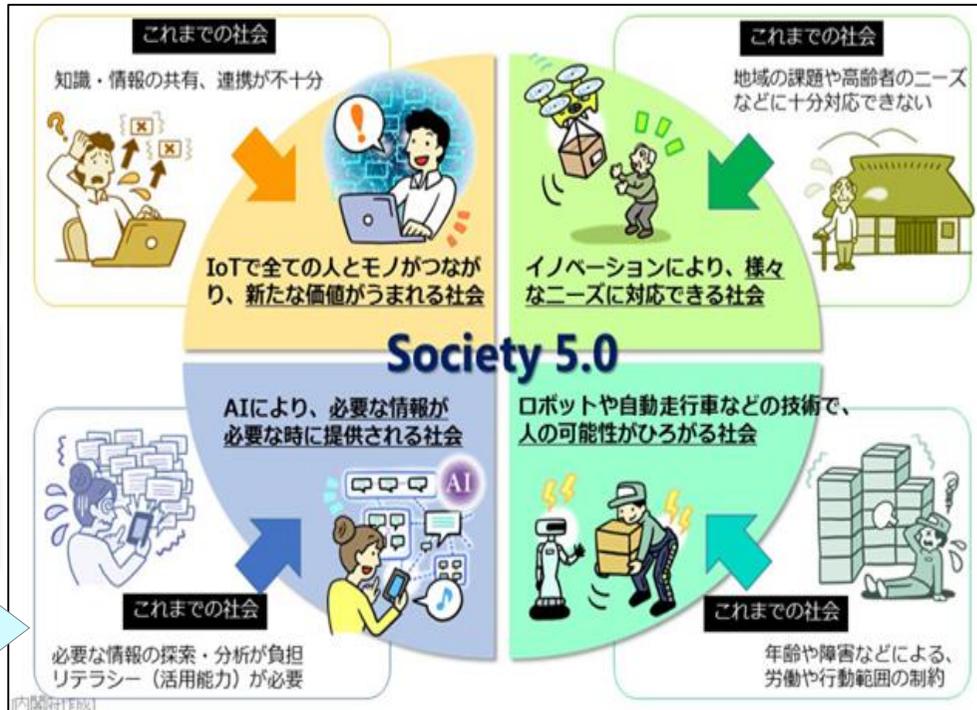
「Society 5.0 に向けた人材育成～社会が変わる、学びが変わる～」  
文部科学省 ([https://www.mext.go.jp/a\\_menu/society/index.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/society/index.htm))

狩猟社会  
(Society 1.0)

農耕社会  
(Society 2.0)

工業社会  
(Society 3.0)

情報社会  
(Society 4.0)



「Society5.0」内閣府 ([https://www8.cao.go.jp/cstp/society5\\_0/](https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/))

### 学校Ver1.0（「勉強」の時代）

- 全員が一斉授業を受け、知識再生型のペーパーテストで成果を測定
- カリキュラムは知識の体系で、知識を正確に記憶する基礎学力、忍耐強さ、計画を着実にこなす正確さの育成などを重視

### 学校Ver2.0（「学習」の時代）

- 主体的・対話的で深い学び
- カリキュラムは能力重視の体系へと転換し、自分自身の文脈で情報を編集し、協働・対話を通じて新しい価値や「納得解」を生み出す力の育成などを重視

### 学校Ver3.0（「学び」の時代）

- 個別最適化された学び
- 文章や情報を正確に読み解き対話する力、科学的に思考・吟味し活用する力、価値を見つけ生み出す感性と力、好奇心・探求力の育成などを重視

### 教育DX

- デジタル技術を活用した学校教育の変革と、より一層の教育の質の向上

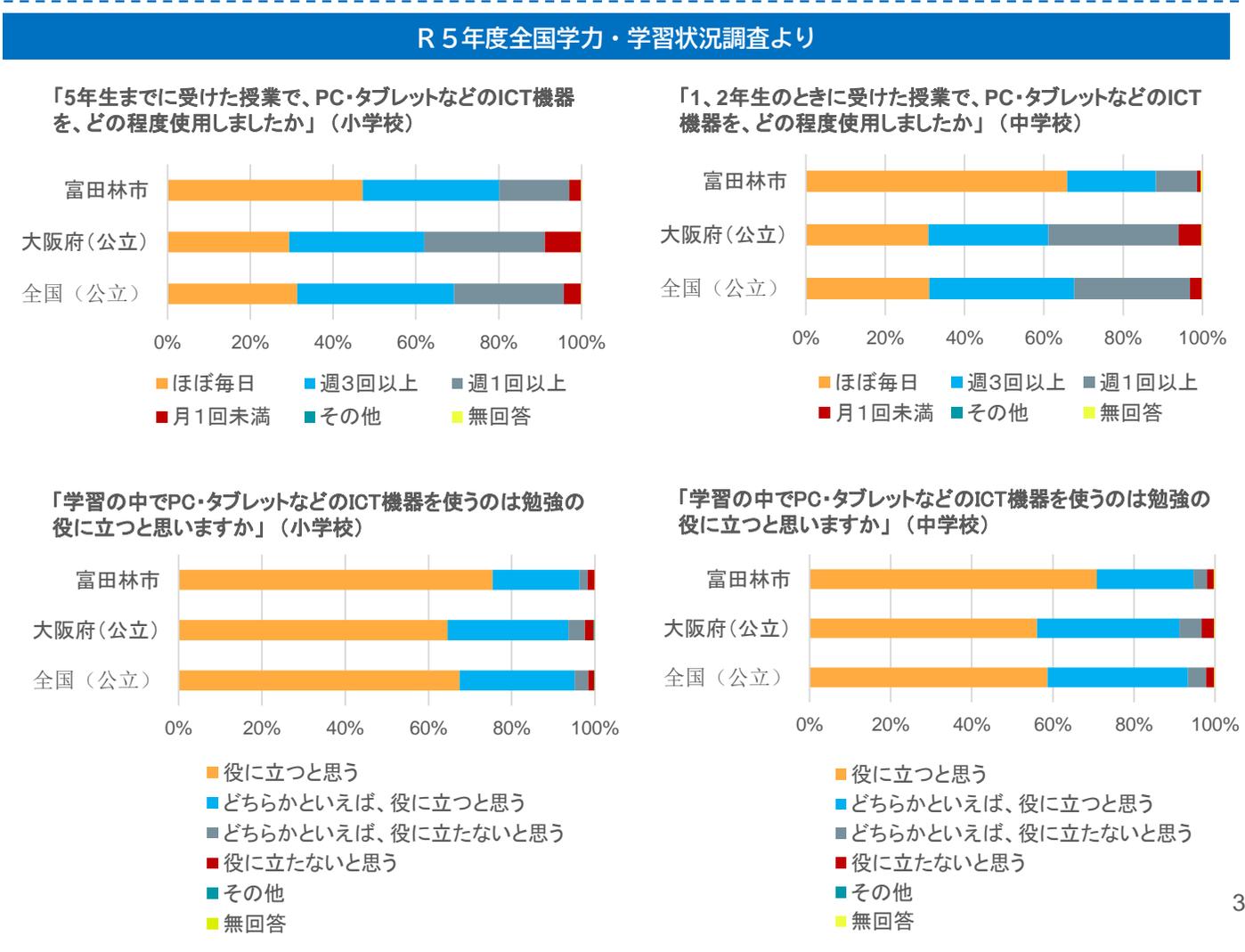
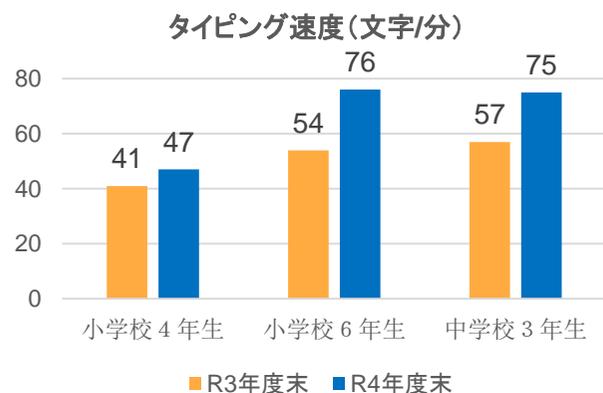
# 2.本市におけるGIGAスクール構想の状況

## 本市の学習場面でのICT活用状況

本市では、GIGAスクール構想のもと令和3年度に「スマートスクール実現プラン」を定め、“～「教わる」授業から、自ら「学ぶ」・お互いに「学びあう」授業へ～”をテーマに、学習場面でのICT活用を中心に取り組んできました。

現在、本市の教育現場では、鉛筆やノートと並ぶ重要なアイテムとして1人1台端末の活用が進んでいますが、今後は国による教育DXの推進状況をふまえながら、本プランにもとづく取組みを進めていきます。

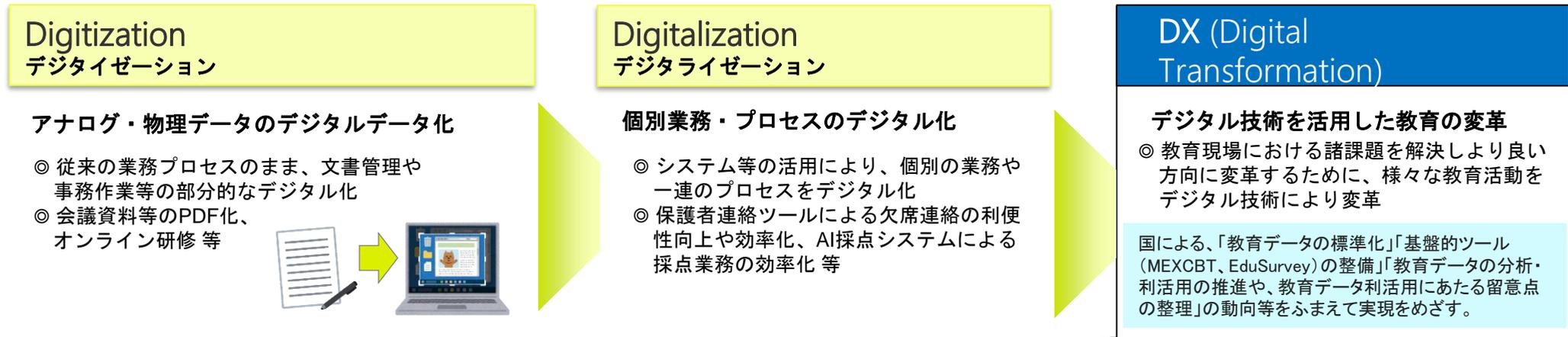
### ・学習場面でのICT活用状況



# 3. 教育DXの実現に向けて

## 教育DXの実現に向けたイメージ

教育DXの実現に向けては、教育DXのビジョンを定め、段階ごとの取組みを進めていく必要があります。また、教育データ（行政系データ・校務系データ・学習系データ）の標準化や利活用に係る留意点等、国の動向を注視しながら進めていく必要があります。



### R3~5年度

日常的な1人1台端末の活用による「学びの変容（授業改善）」や、統合型校務支援システムの導入による教職員の働き方改革の推進

### R6~8年度

## 「誰もが、いつでもどこからでも、誰とでも、自分らしく学べる社会」の実現

- ◎ 1人1台端末の更新
- ◎ 保護者連絡のデジタル化の推進（欠席連絡や各種お知らせの配布等）
- ◎ AI採点システムの導入（主に中学校）と統合型校務支援システムとの連携
- ◎ 学習eポータルをプラットフォームとするAIドリルや学習コンテンツ等の利活用と学習系データの蓄積

### R9年度~

- ◎ 教育データの利活用を考慮した統合型校務支援システムの更新
- ◎ 教育データの把握・分析による、よりきめ細かな学習状況の確認や、児童生徒の状況の多面的な把握と、それらに基づくきめ細かで一人ひとりに応じた指導の実現

### 《国の動向をふまえて》

- ◎ 学習履歴・校務情報・教材情報・教育外の情報等の教育データを効果的に利活用するための手法や先進事例等に関する調査研究
- ◎ ネットワーク環境や各種システム等に関する調査研究・整備、セキュリティ対策の推進
- ◎ 教育データの把握・分析による各種取組みの効果検証や効果的な取組みの普及促進と、新たな施策等の企画立案

### 4. ICT活用と「学びの変容」

ICTを「手段」として活用することで、習得をめざす「学習・能力」

- 生活や社会の中にある問題を発見し、よりよい解決に向けて、自ら課題を設定し、調べたり、必要な情報を収集選択したりして
- 発見した問題を整理・比較し、理解を示しながら分かりやすく表現・伝達している
- お互いの考えを共有・交流することで、自分の考えを深め、新しい視点（考え）を創出しようとしている
- 自分の学びを振り返り、成長を認め、より理解が深まる解決に向けて、粘り強く取り組もうとしている

各教科での学習 ← 従来の学習 → 教科横断的な学習 → 個別最適な学び → 協働的な学び

カリキュラム・マネジメント  
ねらいを達成するために、ICTを活用する目的を明確にした上で、横断的・対横断的な教育活動を実施し、評価・改善する

学習の基盤となる資質・能力

言語能力	情報活用能力	問題発見・解決能力	
A. 知識及び技能	情報に特徴的性質を適切に活用するための知識・技能 ①情報検索に関する技能 ②情報に特徴的性質の特性の理解 ③記号の組合せの理解	問題解決・探究における情報活用方法の理解 ①情報収集、整理、分析、表現、報告の理解 ②情報活用目的設定や評価・改善のための理解 や意思の理解	
B. 思考力、判断力、表現力等	情報検索・情報にキーワードに基づいた情報の検索 ①情報検索の目的・情報の検索 ②情報検索・情報にキーワードの検索	課題や問題とそれの結び付きの発見から捉え、情報及び情報活用を適切に効果的に活用し、課題・問題発見・解決、自分の考えを深め、新しい視点（考え）を創出しようとする力 ③課題の解決に向けた情報活用 ④情報活用による課題の解決や、そのほかの課題の解決に向けた情報活用	
C. 主体的に学び、人との関わり	情報検索・情報にキーワードに基づいた情報の検索 ①自分の考えを深め、新しい視点（考え）を創出しようとする態度 ②自分の課題、計画や改善、ふたつとする態度	課題や問題とそれの結び付きの発見から捉え、情報及び情報活用を適切に効果的に活用し、課題・問題発見・解決、自分の考えを深め、新しい視点（考え）を創出しようとする力 ③課題の解決に向けた情報活用 ④情報活用による課題の解決や、そのほかの課題の解決に向けた情報活用	

ICT活用による働き方変革の推進  
- 校務の効率化による業務の効率化  
- 教材や会議資料等のデータ共有

教材内容や家庭に於けるICT活用  
- デジタル教材・デジタルドリル等の日常的な活用（家庭での活用をまじ）や家庭との連携におけるICT活用

教員の情報教育・ICT指導力の向上  
- 校内研修および研修の充実  
- ICT活用に向けた学習支援の推進

# 4. 教育DXによる変革

## 「誰もが、いつでもどこからでも、誰とでも、自分らしく学べる社会」の実現

教育DX実現後のビジョンの一つは、「誰もが、いつでもどこからでも、誰とでも、自分らしく学べる社会」の実現し「全ての子どもを最大限に引き出す」ことです。また、教育現場における諸課題の解決に向け、デジタル技術の活用による学校教育の変革も求められています。

### ◎これまでは、

- \* 「学校で」教える
- \* 「教員が」教える
- \* 「同時に」教える
- \* 「同一学年に、同じ速度、同じ内容」で教える



### ◎教育DX後は、

- \* 「どこからでも」学べる
- \* 「誰とでも」学べる
- \* 「いつでも」学べる
- \* 「自分らしく」学べる

個別最適な学びと協働的な学びの実現

- ・ 学習にまつわる様々な場・人・モノの「組み合わせ」が広がる
- ・ 学びの内容や目的に応じて、最適な場所や方法で学ぶことができる  
(例えば、同時に集団でしか学べないことを、協働的な学びで学ぶ)
- ・ 教育データの解析に基づき、本人の理解度等に応じた学びが実現する  
(どの学年で、どの内容を、どの順番で学ぶことが妥当か、は標準的な姿にすぎなくなる)



学習者主体の教育の実現により、全ての子どもを最大限に引き出す

一人ひとりに応じたきめ細かな指導



教職員の働き方改革の推進



欠席連絡等、保護者の利便性向上やきめ細かな子どもの状況の共有

### 教育DX

相反する諸課題の解決に向け、デジタル技術の活用により、新たな教育の姿を創造する

どこからでも

緊急時でも、通えなくても、どこからでも学ぶことができる。

誰とでも

専門家とつながる。同じ目標の仲間と学ぶことができる。

いつでも

自分のペースで学ぶことができる。学び戻しも学びを進めることも、いつでもできる。

自分らしく

興味関心を伸ばして、どんどん学べる。自分にあった学び方を選べる。

# 5. 教育の質の向上

## 教育データの利活用（蓄積・可視化・分析）による教育の質の向上

「全ての子どもを最大限に引き出す」ためには、より一層の教育の質の向上を図る必要があります。教育DXを実現する上では、真の「個別最適な学び」や「協働的な学び」の実現や、その検証と改善に向けて、教育データの利活用が重要となります。

なお、教育データの利活用にあたっては、今後の国の動向を注視していく必要があります。

### ◎ 教育データの蓄積や可視化

- 1人1台端末の日常的な活用を進め、AIドリル・授業支援ソフト・Googleアプリ等の各種データをスタディログ・デジタルポートフォリオとして蓄積
- AI採点システムやCBT等の活用によるよりきめ細かな習熟度の把握
- 学習系データ（学習eポータル、学習アプリの利用状況やAIドリル・AI採点システム等のデータ）と校務系データ（出欠状況、健康診断結果、学習評価データ等）の連携により、児童生徒の状況をはじめ、学級全体・学校全体の状況等を可視化
- 可視化したそれぞれの子どもの状況を保護者とも共有



### ◎ 教育データの利活用による個別最適な学びと協働的な学びの実現

#### ・個別最適な学び

##### 指導の個別化

- すべての子どもの基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得のため、それぞれの子どもに応じた重点的・効果的な指導を行う
- AIドリル等を活用し一人ひとりに応じた教材・課題等を設定する
- デジタルポートフォリオ等を活用し、自らの学習を調整しながら粘り強く取り組めるように支援する

##### 学習の個性化

- 児童生徒の興味・関心や学習状況を把握し、個別に目標を設定する
- 目標達成のために、教材や学習方法を個々に選択できるようにする
- 児童生徒が主体的に学習を進めることができるように支援する

#### ・協働的な学び

- 同時に集団でしか学べないことを学んだり、ICTを利用して空間的・時間的制約を超えて遠隔地の学校や専門家とつないで学んだりする
- 多様な価値観や意見を共有しつつ合意形成を図る活動などに取り組む

### ◎ 教育の質の向上に向けた教育行政の推進

- 教育データの把握・分析により、事業や各校の取組みについて効果検証を図るとともに、好事例の蓄積・普及を図る



# 6. 教育DXの実現によるメリット

今後、教育データやデジタル技術を活用した教育DXを実現することにより、子ども・保護者・教職員のそれぞれにとって、次のようなメリットが期待されます。

これまでの  
学校教育

- ・ 教師主導による説明型の一斉授業。
- ・ 欠席者等には、学校で補習を行うこと等で支援。

- ・ 生徒の困り感に気づくまでに時間がかかる。
- ・ 電話や家庭訪問での学校と家庭との連携・・・等

## ◎教育DX後

### 子どもにとって

#### ◎ いつでも学べる

- ・ 自身の学びや成長の記録を一目で振り返り、強みや弱点を簡単に把握し、自分のペースで学習できる。

#### ◎ どこでも学べる

- ・ 緊急時や諸事情で学校に通えなくてもどこでも学習できる。

#### ◎ 自分らしく学べる

- ・ 興味のある分野を発展的に学習できる。それぞれに合わせて自分らしく学習できる。

#### ◎ 誰とでも学べる

- ・ 専門家とつながったり、同じ目標の仲間と学んだりすることができる。

#### ◎ 個に応じた支援

- ・ 自分の辛い状況を大人に発信しやすい。

### 保護者にとって

#### ◎ 学校との連携の利便性向上

- ・ 時間・場所を選ばず、学校との連絡が容易にできる。

#### ◎ 子どもの学校での心理状況がわかる

- ・ 子どもの課題を共有しやすく、家庭学習と学校教育が一体となったサポートが容易にできる。

#### ◎ 子どもの認知・非認知能力がわかる

- ・ ある科目の学力や粘り強さなどの能力を理解し伸ばすことができる。

#### ◎ 子どもの興味関心がよりわかる

- ・ 保護者も一緒に子供の興味関心に寄り添い、楽しむことができる。

#### ◎ 子どもの身体的・心理的発達段階がわかる

- ・ 保護者がそれぞれの子どもに応じた関わり方を把握することができる。

### 教職員にとって

#### ◎ 教育関係業務の効率化

- ・ 統合型校務支援システムの活用により、出欠管理や集計、通知表・指導要録・保健関係資料等に関する業務を軽減できる。
- ・ AI採点システムによってテストの採点時間を減少できる。
- ・ ペーパレス化によって資料準備や共有に係る負担を軽減できる。
- ・ Web会議により移動時間を減少できる。

#### ◎ 学級・学校経営、生徒指導

- ・ 学級の状態がすぐわかる。
- ・ 児童生徒のSOSを早期発見、支援できる。
- ・ 学校全体で子どもの様子を把握、支援できる。

#### ◎ 指導計画・授業準備

- ・ 蓄積されたデータから受け持つ生徒に適した教材が見つかり、個別最適な学びにつながる。
- ・ AIによる分析を活用し、授業改善に取り組むことができる。

## 教育データやデジタル技術の利活用



校務系データや各種学習系データの相互連携と可視化・分析、保護者への提示。保護者連絡ツールの活用等。



# 7. 資質・能力の育成に向けた「学びの変容」

学びを人生や社会に  
生かそうとする  
学びに向かう力、  
人間性等の涵養

生きて働く  
知識及び技能  
の習得

未知の状況にも  
対応できる  
思考力、判断力、  
表現力等の育成

## ICTを「手段」として活用することで、育成をめざす資質・能力

- 生活や社会の中にある問題を見出し、よりよい解決に向けて、自ら課題を設定し、調べたり、必要な情報を取捨選択したりしている
- 収集した情報を整理・比較し、根拠を示しながら分かりやすく発信・伝達している
- お互いの考えを共有・交流することで、自らの考えを深め、新しい価値（考え）を創造しようとしている
- 自らの学びを振り返り、成長を実感し、より困難な問題の解決に向けて、粘り強く取り組もうとしている

各教科での学習

往還

教科横断的な学習

個別最適な学び

往還

協働的な学び

カリキュラム・マネジメント

ねらいを達成するために、ICTを活用する目的を明確化した上で、組織的・計画的な教育活動を実施し、評価・改善する

往還

- ①指導の個別化(個に応じた重点的・効果的な指導による基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得。学びを調整し粘り強く取り組む態度の育成。)
- ②学習の個性化(個に応じた学習活動の提供や、その子どもに応じた課題の設定等により、自ら主体的に学習を最適化できるように支援。)

学習の基盤となる資質・能力

## 情報活用能力

言語能力

A. 知識及び 技能	情報と情報技術を適切に活用するための知識と技能	①情報技術に関する技能 ②情報と情報技術の特性の理解 ③記号の組合せ方の理解
	問題解決・探究における情報活用の方法の理解	①情報収集、整理、分析、表現、発信の理解 ②情報活用の計画や評価・改善のための理論や方法の理解
	情報モラル・情報セキュリティなどについての理解	①情報技術の役割・影響の理解 ②情報モラル・情報セキュリティの理解
B. 思考力、 判断力、 表現力等	問題解決・探究における情報を活用する力 (プログラミング的思考・情報モラル・情報セキュリティを含む)	事象を情報とその結び付きの視点から捉え、情報及び情報技術を適切かつ効果的に活用し、問題を発見・解決し、自分の考えを形成していく力 ①必要な情報を収集、整理、分析、表現する力 ②新たな意味や価値を創造する力 ③受け手の状況を踏まえて発信する力 ④自らの情報活用を評価・改善する力等
	問題解決・探究における情報活用の態度	①多角的に情報を検討しようとする態度 ②試行錯誤し、計画や改善しようとする態度
C. 学びに向 かう力・人 間性等	情報モラル・情報セキュリティなどについての態度	①責任をもって適切に情報を扱おうとする態度 ②情報社会に参画しようとする態度

問題発見・  
解決能力

ICT活用による働き方改革の推進

- 校務の情報化による業務の効率化
- 教材や会議資料等のデータ共有

教科指導や家庭におけるICT活用

- デジタル教科書・AIDリル等の日常的な活用(家庭での活用を含む)や家庭との連絡におけるICT活用

教員の情報教育・ICT指導力の向上

- 校内体制および校内研修の充実
- ICT活用に向けた学校支援の実施

# 8. 「学びの変容」 ロードマップ (GIGAスクール構想の開始時より)

R2年度	R3年度	R4年度	R5年度(小・教科書採択)	R6年度(中・教科書採択)	R7年度
「ICTを“すぐにも””どの教科でも”“誰でも”活用” ～ICT活用体制構築～  準備期《教員研修の充実と校内推進体制の確立》		「教科の学びを深める、教科の学びの本質に迫る」 ～実践の蓄積と検証～  実践期《教材や授業実践の蓄積(データベース化)と検証》		「一人ひとりが夢を実現し、社会課題等を解決できる」 ～資質・能力の育成に向けた効果的なICT活用～  改善期《子どもの実態把握と教育課程の改善》	
<b>ICTを活用した「学習場面」</b> A 一斉学習 B 個別学習 C 協働学習 逆向き設計の授業づくりにより、ICT活用の『ねらい』を明確化		目的に応じて機能やアプリを自ら選択し、活用できる。自らの考えを深め、新しい価値を創造しようとしている。(達成…R5)			様々な場面で、ICTを活用し、主体的に学んでいる。(達成…R7)
A1 教師による教材の提示 B1 個に応じた学習 B2 調査活動 B4 表現・制作 B3 思考を深める学習 B5 家庭学習 C1 発表や話し合い C2 協働での意見整理 C3 協働制作 C4 学校の壁を超えた学習		『分担・協働による同時並行作業』 『複数の意見・考えの共有と整理』 『考えの共有や新たな気づき』 『試行・観察等による気づき・確認』 (NHK for School、ビデオ、GeoGebra、学習者用デジタル教科書のシミュレーション 等)			『個に応じた学習の充実』 (学習者用デジタル教科書、ロイロノート、Googleアプリ、ビデオ、Safari 等) 『校外・海外との交流』 (Meet、Zoom、Googleドライブ 等) ポートフォリオ、アンケート、CBT等を活用したきめ細かな分析と個に応じた指導の継続(自己調整力や粘り強さの向上)
○市教委 ・研修マニュアル ・研修用動画等の作成 ・各種研修の実施 ○各学校 ・端末、アプリ等のテスト利用 ・校内組織体制や指導計画の検討		端末やアプリの基本的な操作ができる。情報モラル・情報セキュリティについて理解している。(達成…R3年度)			『わかりやすい発信・伝達』 (ロイロノート、Googleアプリ、マークアップ、Keynote、Pages、Numbers、iMovie、Clips 等) 『主体的な情報選択』 (Safari、Meet、Zoom、カメラ 等) 『知識・技能の確実な習得』 (ラインズ、QR、タイピング練習サイト等の活用。ロイロノート、Googleアプリを用いたポートフォリオ作成) 『興味・関心を高め、わかりやすく説明』 (写真、ビデオ、スライド、Keynote、NHK for School、指導者用デジタル教科書 等による提示)
①活用時数	概ね、1日に2～3コマ程度活用(6コマ中)			概ね、1日に3コマ以上活用(6コマ中)	
②タイピング	小学校 中学年 6字、高学年 8字 /分 中学校 20字 /分	小学校 中学年 8字、高学年 11字 /分 中学校 24字 /分	小学校 中学年 10字、高学年 14字 /分 中学校 28字 /分	小学校 中学年 12字、高学年 17字 /分 中学校 32字 /分	小学校 中学年 15字、高学年 20字 /分 中学校 35字 /分
③アンケート	QRコードやカメラ等の基本的な操作ができる(肯定的回答 7割以上)	目的に応じてアプリや機能を自ら選択し、活用できる(肯定的回答 7割以上)		様々な問題を自分で見つけ出したり、よりよい解決方法を考えたりするために、ICTを活用することができる(肯定的回答 7割以上)	

すべての子どもが自分の意見を発表できる授業づくりの推進  
一人ひとりの学習記録やポートフォリオ等を活かし、それぞれに応じた課題設定を行う等、個に応じた指導を充実

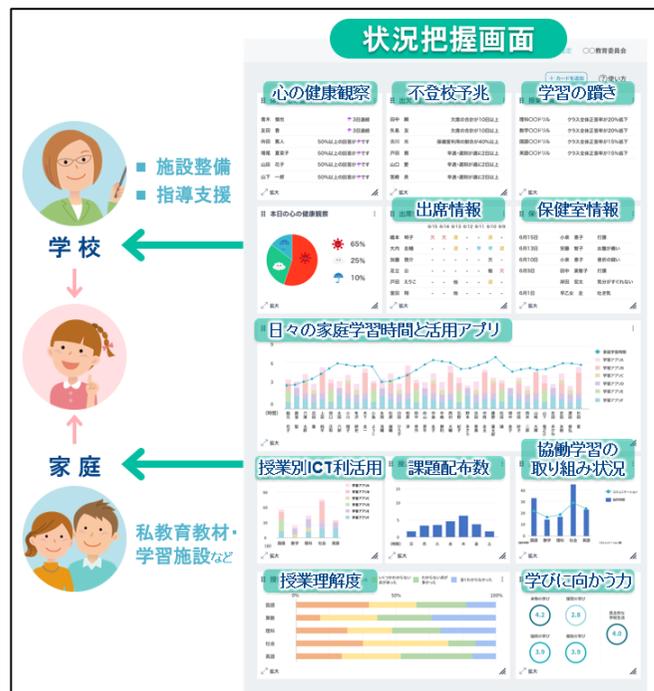
一人ひとりが自分に合ったICT活用方法を見出せるように、子ども自身が活用方法を考え、工夫する機会を設定(生涯の学びにつながる情報活用能力の育成)

醸成

醸成

# 9. 教育DXにおける学校と家庭の連携

## ① 学習eポータル（まなびポケット）



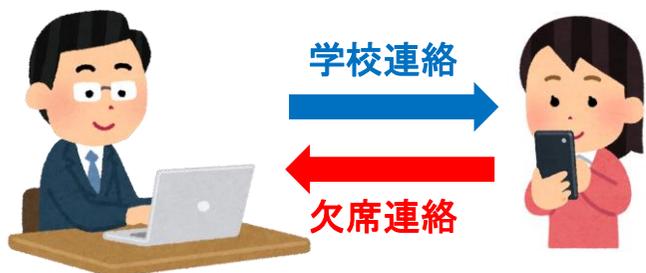
○児童・生徒のメンタルヘルス、保健室情報などの生活に関する情報

○単元テストのつまずきや家庭学習の状況、協働学習実施状況、授業満足度などの学習に関する情報

学校と家庭で容易に共有

子どもの課題を共有し、家庭での学習指導に活用できる。

## ② 保護者連絡ツール



### 学校連絡

教職員のPCから配信した連絡（プリントのPDFなど）を保護者のスマートフォンのアプリで確認。

ICタグによる児童の登校確認。

### 欠席連絡

保護者のスマートフォンアプリから送信された欠席連絡（遅刻、早退を含む）を教職員のパソコンで状況確認。

情報共有を正確かつ簡単に行うことができる。<sup>10</sup>

# 10. 教育DXによる教員の働き方改革

## 従来の働き方【教育DX前】

- ・ 黒板に何度も同じ図や問題を書く。
- ・ 紙の教材を使っでの授業準備。



- ・ 宿題のチェックのため、ノートを集める。
- ・ テストの採点作業に時間がかかる。

- ・ 紙による学校から保護者への連絡やアンケート実施。
- ・ 働く保護者へ、勤務時間外の電話連絡。



- ・ 紙媒体の資料での集合型の会議。
- ・ 情報がデータ化されておらず、探し出すのに負担がかかる。

ICTによる業務効率化

## これからの働き方【教育DX後】

- ・ 電子黒板による即時表示で時間配分効率化。
- ・ メタデータ検索により授業に使える素材をすぐ収集可能。



- ・ デジタルドリルによる自動集計が可能。
- ・ AI採点による採点業務の負担軽減。

- ・ データによるアンケートを活用することで集計効率向上。
- ・ 連絡ツール活用で、場所や時間にとらわれず、保護者との連絡が可能。



- ・ 資料をデータ共有し、場所にとらわれないweb会議。
- ・ 教育データのオンライン化により、どこからでも取り出し、校務負担の軽減になる。

# 11.教育DX実現に向けた計画（R6～10年度）

	R6年度(2024)	R7年度(2025)	R8年度(2026)	R9年度(2027)	R10年度(2028)
学習指導要領	「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善			次期学習指導要領改訂 (見込み)	
1人1台端末・授業支援ツール等	次期端末等の仕様検討	1人1台端末等の更新	次期端末等を活用するための 教職員研修		
デジタル教科書・デジタル教材・AIドリル等	個別最適な学びの実現に向けた活用や効果的な事例の共有				
不登校児童生徒の支援	オンラインによる教材や授業配信など、児童生徒の状況に応じた支援の実施				
保護者連絡ツール	保護者連絡のデジタル化に向けた試行	欠席連絡や各種おしらせ・学校便り等の配布に関するデジタルツールの活用			
校務支援システム・デジタル採点システム等	デジタル採点システムの導入と活用（中学校）			次期校務支援システム等の仕様検討	校務支援システム等の更新
ICT支援員	ICTの効果的な活用を図るための環境整備や授業支援・教職員研修等				

		R5年度（現状値）	R10年度（目標値）
成果指標	タイピング	小学校 中学年 45字/分、高学年 86字/分、中学校 78字/分	小学校 中学年 50字、高学年 100字/分、中学校 110字/分
	アンケート	全国学力・学習状況調査 児童・生徒質問紙 「今までに受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器をどの程度使用しましたか」 「ほぼ毎日」と回答：【小学校】45% 【中学校】63%  全国学力・学習状況調査 学校質問紙 「ICTを活用した校務の効率化（事務の軽減）の優良事例を十分に取り入れていますか」 「十分に取り入れている」と回答：【小学校】31% 【中学校】38%	全国学力・学習状況調査 児童・生徒質問紙 「今までに受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器をどの程度使用しましたか」 「ほぼ毎日」と回答：【小学校】70%程度 【中学校】90%程度  全国学力・学習状況調査 学校質問紙 「ICTを活用した校務の効率化（事務の軽減）の優良事例を十分に取り入れていますか」 「十分に取り入れている」と回答：【小学校】70%程度 【中学校】70%程度
関連事業	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 教育研究事業（教職員研修の実施）</li> <li>● 小学校教育用パソコン管理事業、中学校パソコン管理事業</li> </ul>		

※上記計画については、教育データの標準化や教育データの利活用をはじめとした国における今後の議論や方向性を十分に踏まえ、必要に応じて改訂しながら取り組む。